



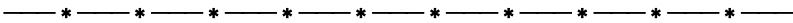
Data

監督：三島有紀子
 脚本：松井香奈、三島有紀子
 原作：湊かなえ『少女』（双葉文庫刊）
 出演：本田翼／山本美月／真剣佑／佐藤玲／児嶋一哉／稲垣吾郎／菅原大吉／川上麻衣子／銀粉蝶／白川和子／中村瑠輝人

👁️👁️ みどころ

『告白』（10年）もややこしかったが、17歳のJK（女子高生）2人を主人公にした本作も日本の都市法制と同じように複雑かつ難解。清楚で上品な女子高が舞台だが、「因果応報、地獄に堕ちろ！」が統一テーマ（？）だから、その対比に唖然！

遺書の朗読から始まる本作は死の臭いがプンプンするが、なぜ2人のJKは人の死ぬところを見たいの？団塊世代のおじさん（じいじ？）にはそもそもそれが不可解だから、17歳のJKの心理に深く入り込み理解するのは、もともと無理がある。しかし、やっぱり面白い！それは一体なぜ・・・？



■□■女性活躍社会が本作で実現！■□■

第3次安倍第2次改造内閣は「一億総活躍社会」を掲げ、中でも女性が活躍できる社会を1つのテーマとしている。しかし、現実には「税金の壁」と言われている「103万円の壁」、「社会保険の壁」と言われている「130万円の壁」をはじめとして、さまざまな「壁」がある。もっとも、東京では8月に小池百合子新東京都知事が誕生したし、アメリカでは11月に「嫌われ者同士の対決」の中で、アメリカ初の女性大統領が誕生する見込みだ。

作家の世界では既に女性の進出が著しく、中でも湊かなえは『告白』（10年）（中島哲也監督）（『シネマルーム25』51頁参照）、『北のカナリアたち』（12年）（阪本順治監督）（『シネマルーム30』222頁参照）、『白ゆき姫殺人事件』（14年）（中村義洋監督）（『シネマルーム32』227頁参照）等、多くの作品が映画化されているすごい女

流作家だが、本作では監督に三島有紀子が抜擢された。

私は同監督の名前を『しあわせのパン』（11年）、『ぶどうのなみだ』（14年）で知っていたが、映画を観たのは『緋い裁つ人』（15年）がはじめて（『シネマルーム35未掲載）。彼女はNHKに入社してドキュメンタリー作品に取り組むという好環境にいた才女だが、劇映画づくりをしたいとの欲求に逆らえずに11年間勤めたNHKを辞め、不安定な監督稼業（？）に踏み出したらしい。私は月に1度東京に新幹線出張しているが、グリーン席には『月刊ひととき』があり、その10月号には「この熱き人々62」として三島有紀子を取り上げられていたからビックリ。既にここまでのビッグネームに成長していたわけだ。

更に本作はタイトルからもわかるとおり、桜川女学院に通う高校2年生の共に才色兼備のJK（女子高生）たる桜井由紀（本田翼）と草野敦子（山本美月）が主人公だから、まさに本作は女性活躍社会の中で生まれた映画だ。

■□■まずは遺書の朗読と自殺のシーンに注目！■□■

正式の遺言書は秘密証書ではなく公正証書しておく方が安全だが、自殺する場合に残す遺書は封筒に入れられたままだここに置かれているのが普通。したがって、それが朗読されることはまずありえない。しかし本作は、定番のブレザーやセーラー服とは異なる、スタンドカラーのブラウスとジャケットという桜川女学院の制服に身を包んだJKたちによる遺書の朗読劇から始まるので、それに注目！

さらに、本作導入部では国語教師・小倉一樹（児嶋一哉）の授業風景と教室に集まる由紀・敦子の同級生たちの日常風景が映し出される。それを見ていると、国語の授業のデータラメぶりは想定内だが、課外での彼女たちは互いに仲が良いのか悪いのか、男の私にはサッパリわからない。したがって、もしそんな女子高の中で「生存競争」に負けたら、生きる術を失って自殺……。そんな事件がすぐに起こりかねないことが容易に想像できる。

しかしてそんな予想通り、スクリーン上では水の中に飛び込んで自殺するシーンが登場するが、このJKは一体ダレ？新たに黎明館高校から桜川女学院に転校し、由紀と敦子の親友関係の中に割り込んできた（？）滝沢紫織（佐藤玲）からは、黎明館高校の時の親友であった星羅の自殺を目撃したとの衝撃情報が。星羅は別の学校の教師と交際していたことをバラされたために自殺したらしいが、そんなヒドイことをしたのは一体ダレ？もっとも由紀はそれを聞いてもことさら驚くわけではなく「死体ではなく、人が死ぬ瞬間を見たい」と切り返したから、その強さ（？）にビックリ！

JKの世界はおじさんたちにはあこがれの美しい世界に見えるが、さてその内実は……？

■□■『ヨルの綱渡り』がベストセラーに！新人賞も！■□■

第155回（2016年上半期）芥川賞は村田沙耶香の『コンビニ人間』が受賞したが、

第130回（2003年下半年）は金原ひとみの『蛇にピアス』と綿矢りさの『蹴りたい背中』がW受賞した。このように近時は芥川賞での若手女流作家の進出が著しいが、本作に見るように小倉の授業中に授業そっちのけでせっせと小説『ヨルの綱渡り』を書いている由紀の集中力もすごい。もっとも、私たち団塊世代ならともかく、今ドキのJKが原稿用紙に手書きで小説を書いているのはいささか驚きだ。湊かなえが本作をそういう設定にしたのは、ある日完成した原稿が盗まれるという事件が発生し、その復元が不可能になったという事件につなげるため。つまり、由紀がパソコンに原稿を打ち込んでいた場合には、そんなバカげた（窃盗）事件は起こりえないわけだ。

映画の中では、由紀が執筆している小説『ヨルの綱渡り』の内容は断片的にしかわからない。しかし、ヨルとは夜ではなく、どうも剣道の負け試合をきっかけにいじめの対象になってしまった親友・敦子のことらしい。『ヨルの綱渡り』はそんな由紀の大切な親友・敦子のために書いている小説だが、パンフにある「物語に登場する10のキーワード」を読めばともかく、スクリーン上の展開を見ているだけではそこらあたりの事情を理解するのは困難だ。スクリーン上では学校の屋上に上った敦子が今にも飛び降り自殺をしようとするシーンが映し出され、それを由紀がしっかり支えるが、あっと言う間もなく由紀はその手を離してしまうからビックリ！さて、これは現実？それとも幻・・・？

そんな風に思っていると、ある日由紀のカバンの中から『ヨルの綱渡り』の完成原稿が消えてしまったから大変。必死で捜したが結局見つからなかったうえ、何と国語教師の小倉がそれをそのまま盗用して、自分の作品として発表した小説がベストセラーに。さらに、これによって小倉はある文芸誌の新人賞まで獲得し一躍人気作家になってしまったから、こりゃ一体どうなってるの？しかして、由紀の心の中に生まれた小倉に対する怒りは？その表現は？その報復は？

■□■夏休みのボランティアはいいが、その動機は？■□■

桜川女学院で互いに交わす挨拶は「ごきげんよう」。下校時に校門を守っている守衛といちいち「ごきげんよう」とあいさつを交わすJKたちの姿を見ていると、この女子高の厳格さが際立ってくる。しかし敷地を一步出ると、今ドキのJKの恐さがあちこちに……。転校してきた紫織は、何の躊躇もなくいわゆるブルセラ店に品物(?)を持ち込んだりする今ドキのストレートなJK・・・？その結果、お嬢様校にある程度収まっていた(?)由紀も敦子も、その影響を少しずつ受けることに……。ある日由紀は紫織とつるんで駅に立つ男に「あなた痴漢したでしょう」と絡み、カネを巻き上げようとしたが、さてその結末は？

感受性の強い由紀と敦子が紫織の影響を最も強く受けたのは、前述した紫織からの「自殺した人間を目撃した」との情報。それを更に「実際に人が死ぬところを見たい」という欲求にエスカレートさせた由紀と敦子は、夏休みを利用してそれぞれボランティア活動に

赴くことに。敦子のそれは老人ホーム。そこには由紀の祖母の水森正代（白川和子）も認知症で入居していたが、敦子が親しくなったのは老人ホームに勤務する中年男の高雄孝夫（稲垣吾郎）。しかし、敦子は高雄からいかなる影響を？他方、由紀がボランティアとして赴いたのは、ある病院。由紀がそこで親友になったのは意外にも、手術成功の確率が7%だと平然と語る小学生の患者・昴（中村瑠輝人）と、昴と共に入院している太一の2人だ。

夏休みのボランティアはいいことだが、ご両人が「人の死ぬところを見たい」という動機で老人ホームと病院を選んだのはいかなるもの？誰でもそう思うはずだが、たとえ動機が不純でもそこで得られるものが大きければそれでOK？そこらあたりを、原作者の湊かなえと監督の三島有紀子はどのように考えているのだろうか？団塊世代の男である私にはついていけない複雑な部分が多すぎるのでいささかしんどいが、興味だけは次々と・・・。

■敦子は左足にケガ、由紀は左手にケガ■

敦子を演じた山本美月も、由紀を演じた本田翼も共に現代風の美人だが、歳のせいかわ私は最近の女の子の顔はみんな似たように見えて仕方がない。敦子は幼い頃から剣道を習い、将来有望と期待されていたが、高校の団体戦でミスをしたことを機にいじめの対象になってしまったうえ、左足を引きずって歩かなければならない身体に。他方、由紀はいじめの対象になっていた敦子を守ってやることができないもどかしさの中で、敦子のために『ヨルの綱渡り』を書いていたが、それが小倉によって盗作されたため、その怒りは頂点に。

本作では敦子の家庭環境は描かれませんが、由紀は父・義孝、母・慶子（川上麻衣子）の他、祖母・正代と共に生活していたが、この正代は厳格で子供の頃は由紀に対してよく折檻をしていたらしい。そして、ある日その折檻が限度を超えたところまでエスカレートした結果、由紀の左手には今も大きな傷跡が・・・。

こんな風に心の中のみならず身体にもキズを負った2人だから、その「親油性」がなおさら強くなったのかもしれないが、実は敦子が左足を引きずっているのは真っ赤な嘘。今では完治しているのに、なぜ敦子はあえてそんな風に左足を引きずって歩いているの？それは親友の由紀の前でも同じだからアレ・・・。そこらあたりのJKの複雑な心理は、男の私には到底理解不可能・・・？

■JKの口から「因果応報、地獄に堕ちろ！」とは・・・■

湊かなえの作品に登場するのは個性の強い人物、大阪弁でハッキリ言えば、ケツタイな人物ばかりだが、それは本作でも同じ。敦子がボランティアとして赴いた老人ホームで親しくなった高雄はどこか曰くありげだし、由紀がボランティアとして赴いた病院で親友になった昴も太一もかなりケツタイな子供だ。さらに、父親を知らない昴から手術を受けるについて最後の願いとして「父親に会いたい」と言われた由紀は、昴の父親の所在を知るという謎の男・滝沢芳也（菅原大吉）と接触するが、この男のケツタイさは特筆もの。そ

の後に由紀と滝沢が見せるミステリーめいた展開は意外性の連続となるからそれに注目！

また、いささか狂気じみた正代の口癖は「因果応報、地獄に落ちろ！」だが、そんな言葉で孫の由紀が昴や太一に対して平気で語っている姿にビックリ！JKの口からこんな言葉が出るとは、いやはや……。さらに、今ドキのJKは学習効果が高いようで、紫織とつるんで痴漢犯をでっち上げた由紀はそのことに罪悪感を持っていたにもかかわらず、滝沢の「魔の手」を逃れるため、恋人の牧瀬光（真剣佑）とつるんで逆に滝沢を脅すことに。牧瀬のビデオの中には何ともしごいシーンが録画されたが、さて由紀と牧瀬はこれをどのように活用するの？

その他、本作後半には「因果応報、地獄に落ちろ！」の言葉がいかにもピッタリの、凄かなえ特有の恐ろしい展開が続くので、それに注目！

■□■ネタバレ厳禁！その前にタネ明かしは？■□■

ミステリーものはネタバレ厳禁だが、本作でもそれは同じだ。本作の導入部は遺書の朗読から始まり、小説の盗用や痴漢のでっち上げ、あちこちでの自殺を含む人の死ぬシーンの目撃が続いていく。中盤では敦子がボランティアで赴いた老人ホームと、由紀がボランティアで赴いた病院での思いがけないストーリー展開が続いていく。そして、本作の結末ではそれらがすべて「因果応報、地獄に落ちろ！」の法則でつながり合っていることが明らかにされるから、それに注目！

なるほど、そうなのか……。よくよく考えると、本作の全体としての構成が緻密で伏線の配置もすべて計算づくでされていることがわかるのだが、何せ登場人物が多いうえその1人1人のキャラが複雑かつ難解なので、トータルの物語の理解は難しい。1つだけ禁断のネタバレをすれば、由紀が体を張った努力の末に昴の父親（＝高雄）を昴の病院に連れてきたことによって、感激の再会、涙の再会！そう思っていると、次のシーンでは昴に腹を刺された高雄が倒れ込むのでアレレ……。こりゃ一体どうなっているの？これはいかなる因果応報？

その他、本作の理解はかなり難しい。したがって、本作についてはネタバレ厳禁はもちろんだが、その前にストーリー全体のタネ明かし、伏線設定の意味、各キャラの正確な理解と分析、そういうものが不可欠になる。本作を1度観ただけでそれが十分にできたとは思えないので、私はこの評論にはあまり自信がないが、日本の都市法制が複雑かつ難解なのと同じように、本作も複雑かつ難解なことをしっかりふまえた上で本作を鑑賞することをおすすめしたい。

2016（平成28）年10月14日記